



Title	Alterations of the p53 gene in occupational bladder cancer in workers exposed to aromatic amines
Author(s)	安永, 豊
Citation	大阪大学, 1998, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40750
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	やす 永 豊
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学位記番号	第 13702 号
学位授与年月日	平成10年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学研究科病理系専攻
学位論文名	Alterations of the p53 gene in occupational bladder cancer in workers exposed to aromatic amines (職業性膀胱癌におけるp53変異の検討)
論文審査委員	(主査) 教授 青笹 克之 (副査) 教授 北村 幸彦 教授 奥山 明彦

論文内容の要旨

【目的】

染料製造に従事する人には高率に膀胱癌が発生することが知られている。疫学的調査および動物を使った発癌実験により、染料の中間体である benzidine, β -naphthylamineなどの芳香族アミノ化合物の発癌性が示されている。職業性膀胱癌の臨床所見はすでに知られているが、発癌メカニズム特に遺伝子変化については報告がない。癌抑制遺伝子のひとつである p53は多くの悪性腫瘍において異常がみられることがよく知られており、さらに特定の発癌物質あるいは環境要因によって特定の変異が生じることが明らかになっている。本研究では分子生物学的手法を用いて、職業性膀胱癌における特異的な p53 遺伝子異常を明らかにすることを目的とした。

【方法】

職業性曝露が明らかな膀胱腫瘍患者26例について、またコントロールとして、職業性患者と同一の施設において治療を受けた職業性曝露歴のない膀胱腫瘍患者33例を対象とした。職業性膀胱腫瘍患者から初発病変 ($n = 29$) および再発病変 ($n = 24$)、非職業性膀胱腫瘍患者から初発病変 ($n = 38$) が得られた。これらの病変より採取され、パラフィン包埋された材料からDNAを抽出した。p53のexon5から8の領域について、それぞれのexonをコードするprimer間で、PCR反応をおこない、SSCP法で変異DNAを検出した。アクリルアミドゲルで異常なバンドとして認められた変異DNAは、direct sequencing法により塩基配列の解析をおこなった。

【結果】

職業性膀胱癌 8例11病変 (dysplasia 5病変を含む)において変異が認められた。いずれの変異も point mutation により異なったアミノ酸に置換する missense type であった。2例においては同一病変から2つの相異なる変異がみられる double mutation を示した。1例は初発病変と全く同じ変異 [codon280; Arg (AGA) - Thr (ACA)] が2年後の再発病変においても認められた。多発性病変は9例にみられ、そのうち1例では癌で認められた変異 [codon280; Arg (AGA) - Thr (ACA)] とは異なった変異 [codon138; Ala (AGA) - Thr (ACC)] が隣接する正常上皮においてみられ、また別の症例では癌でみられた変異 [codon273; Arg (CGT) - His (CAT)] と異形成での変異 [codon151; Pro (CCC) - Ser (TCC)] がやはり異なって認められた。計13変異のうち9変異は exon5 に起こっており、

とくに codons 151, 152 の部位で好発していた。従来の非職業性膀胱癌でしばしば報告されている CpG site における変異は 1 例に認めるのみであり、変異のパターンとしては dipyrimidine site における C to T transition が 7 変異と最も多く認められた。

一方非職業性の膀胱癌では 12 例から 12 病変 (dysplasia 2 病変を含む) に変異がみられた。いずれの変異も point mutation であるが、2 病変はアミノ酸置換を認めない silent type、また 1 病変については stop codon に変異する nonsense type を示していた。2 例に double mutation を認めた。計 14 変異のうち 8 変異は exon 7 に起こっており、exon 5 での変異は 1 例だけであった。CpG site における変異を 4 例に認めたが、dipyrimidine site における変異は全く認めない。変異のパターンとしては G to A transition が 5 病変にみられて最も多く、G to T/C transversion がこれに続く。C to T transition のパターンは 1 例だけであった。統計学的検討の結果、職業性膀胱癌においては exon 5 における C to T transition の頻度は有意に高いことが判明した (chi-square test, $p < 0.01$)。

【総括】

職業性膀胱癌発症の初期の段階から p53 遺伝子の異常が起こっており、mutation の起こる部位および様式から、芳香族アミン曝露による特異的な変異の可能性が示された。また多発病変において異なる変異がみられたことは複数の clone の存在を示しており、従来報告してきた多発性膀胱腫瘍の单一クローラン由来说と異なる結果であった。このことは職業性膀胱癌に多クローラン性発症するものがあることを示唆している。

論文審査の結果の要旨

職業性膀胱癌は染料製造に従事する労働者に高率に発生する膀胱癌であり、職業病のひとつとして有名である。染料の中間体である Benzidine, β -Naphthylamine などの芳香族アミノ化合物が発癌物質として疫学的に証明されている。また職業性膀胱癌は特定の疫学要因によって発症する悪性腫瘍として捉えると、膀胱腫瘍の発生機序を考えるうえで重要な疾患として位置づけられる。職業性膀胱癌の臨床報告はすでに知られているが、発癌メカニズム特に遺伝子変化についての知見は過去に見当たらない。本研究では癌抑制遺伝子のひとつである p53 遺伝子の異常を分子生物学的手法を用いて検討した。方法は職業性膀胱癌の初発および再発病変から抽出した DNA について、PCR-SSCP 法により変異を検出し、direct sequencing 法によりその変異部位の塩基配列の解析をおこなった。この際、コントロールとして職業性曝露歴を有しない非職業性膀胱癌患者を設定し、比較検討をおこなった。その結果、職業性膀胱癌における特異的な p53 遺伝子異常、すなわち dypyrimidine site において C to T transition pattern をとることが非職業性膀胱癌に比べて有意に多いことを明らかにした。また多発性を示す症例においては病変によって mutation の異なる例もみられた。膀胱癌は多発性病変として発症する腫瘍としてよく知られているが、従来の報告では多発性を示す腫瘍はすべて単クローラン性発症であることを示すものであったが、多発性を示す職業性膀胱癌においては多クローラン発症するものがあることが明らかになった。このことは多発性膀胱腫瘍の腫瘍起源を考えるうえでとりわけ重要である。したがって本研究は学位に値するものであると認める。